

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

## (7) 甲殻類

大型甲殻類は日本には約100種が生息し、埼玉県からはこれまでに7科14種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた9種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約22%にあたる2種をレッドリスト掲載種とした。

これまでの大型甲殻類の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版の5種、前版での6種、そして今回の2種と、レッドリスト掲載種は1/3に減少した。その理由は、これまでのレッドリスト掲載種の生息状況が大幅に好転したことによるものではなく、前版まで用いてきた地帯区分ごとの評価をやめ、全県を一つの生息環境とみなす観点で種ごとの生息状況の評価を大幅に見直した結果である。また、スジエビやモクズガニ、サワガニなどの種については徹底した現地調査をおこなって生息状況の正確な把握に努め、全県一区のレッドランクの評価に反映させた。

県内各地で実施した甲殻類全般に関する調査では、湧水や湿地の消失、河川改修による流水域環境の変化などが顕著な低地帯から台地・丘陵帯において、生息環境が悪化していることが明らかになった。前版ではNT2にランクされていたイワガニ科のモクズガニは、両側回遊性の強い甲殻類で、一部は河口付近に定着する個体が見られるが1990年以前から生息数の減少傾向は認められず、遡上する個体は多くなっていることからレッドリストから外した。本種は、荒川、中川では殻幅2～5cm程度の稚ガニが3～6月に遡上している。荒川では河口付近から上流の寄居町玉淀ダム堤体下まで分布しており、利根川では、河口から153km上流にある利根大堰の魚道を遡上し、河口から170km上流の小山川合流付近まで生息を確認している。さらに河口から200km上流の群馬県境の烏川、神流川合流付近まで記録があり、上流域の群馬県にまで遡上していることが確認されている。

モクズガニの生息確認には、捕獲しやすい季節と場所を選び、特殊な漁具・漁法等を使用した調査を実施した結果、本種は荒川・利根川水系の河川、支派川、農業用水路などに広く生息していることが明らかになった。

また、前版でDDとされたメクラヨコエビ科のヤマトナメシヨコエビは、井戸から発見される地下水種であり、調査が困難であるため調査対象から外した。

テナガエビ科のスジエビとテナガエビは前版ではRTであったが、これら2種はリストから外し、ヌカエビ科のヌカエビはVUからNT2にランクを下げた。これら3種は、河川の源流域を除く台地・丘陵帯から低地帯の河川や汽水域（ヌカエビを除く）、その支派川、用水路やため池等に生息するが、主な生息地は河川である。また、3種は河川を溯ることができ、ヌカエビやスジエビは低山帯のヤマメ生息域まで生息する。生息する下限はヌカエビを除き汽水域までである。3種の中でヌカエビは最も小型であり、他の甲殻類や魚類、鳥類等の天然餌料となっており、繁殖力は強く、広い範囲に分布している。スジエビ、テナガエビは、荒川では秋ヶ瀬取水堰下まで両側回遊型が分布し、新河岸川、利根川水系の汽水域では多くの個体を確認されている。河川横断物で遡上が分断された淡水域では陸封型が荒川・利根川水系の河川や支派川、用水路、ため

池、池沼等に分布している。ヌカエビはスジエビと混生している場所が多く見られ、縄張り行動の強いテナガエビとの混生は少ない。また、スジエビとテナガエビが混生している水域も見られ、これら3種は1990年以前から発生状況は安定していると考えられてきた。しかし、この中でヌカエビは、生息域が最近になって急速に縮小している現象が確認された（金澤，2015a）ためランク変更に留めた。前版では触れられていないが、本県では、2003年頃から県西部の河川でヌマエビ科2種の移入と繁殖が確認され、それらは急速に分布域を拡大している。これらは西日本に分布するヌマエビ科カワリヌマエビ属ミナミヌマエビの国内移入と、ミナミヌマエビの亜種とされる中国・韓国に分布するシナヌマエビの国外移入である。

シナヌマエビは1960年以降に国内に入り、ミナミヌマエビと共に釣りの生き餌やペットとして買われたものが放され繁殖している。現在、県内に多く生息しているのはシナヌマエビと思われるが、ミナミヌマエビとシナヌマエビは形態が酷似しており、交雑個体も多く、同定は難しい。金澤（2015b）によると、利根川・荒川水系24河川40地点及び3用水で採集した個体を精査した結果、全ての水域で移入種と思われるカワリヌマエビ属が確認されている。また、河川の流程分布は、汽水域を除く下流から上流まで広く、在来種のヌカエビの確認地の最も高い標高は244mであるのに対し、移入種と思われるカワリヌマエビ属も同184mと、上流域への侵入が可能であるとしている。また、現時点では両者が棲み分けている水域は見られないが、魚道のない堰や頭首工等の河川横断物では、魚類等遡上阻害物として両者が分断され、上流はヌカエビ、その下流はヌカエビと移入カワリヌマエビ属が混生し、さらに下流では移入カワリヌマエビ属が優占種になっている水域が多いこと、移入カワリヌマエビ属は河川を遡上することができ、さらに上流へ侵入するおそれがあること、荒川や利根川など両者が混生する水域では、すでに移入カワリヌマエビ属が占める割合が高くなっており、いずれヌカエビが駆逐される恐れがあることなどを併せて報告している。

サワガニ科のサワガニは前版のRTからNT2にランクを変更した。本種は清流にだけ生息しているのではなく、台地・丘陵帯や低地帯の河川とその細流や湧泉、さらに水辺から離れた湿り気のある場所など水中以外にも生息する。一方、食用のための乱獲により減少している生息地が多く見られ、河川改修工事により生息地が消滅している事例もある。生息基盤が特に脆弱な生息地では、乱獲防止や生息環境の保全に配慮した工法の選択といった取組みも必要である。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、岡田 要（1965）などを参照した。

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・  
円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
魚類・円口類  
昆虫類  
甲殻類  
多足類  
クモ目  
軟体動物  
扁形動物

〔目名・科名〕	エビ目ヌマエビ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	<b>ヌカエビ</b>	指定状況			
〔学名〕	<i>Paratya improvisa</i> (Kemp)	-			
【形態】	体長は30mm内外。生時の体色は褐色あるいは緑褐色で、メスは産卵期には濃い緑褐色を呈す。額角は比較的長く、棘式は4～20/1～6で、上縁の棘は眼柄あるいは角膜部付近から前方に存在する。頭胸甲には眼上棘、触角上棘を有する。				
【国内分布】	本州（伊勢湾東部から新潟県村上を結ぶ線から以东および以北）				
【主な生息環境】	河川中下流域、農業用水、池沼に生息する。汽水域には生息していない。テナガエビ科スジエビより上流に生息することもあり、上限は標高200m以上のヤマメ生息域に達することもある。繁殖力が強く、河川では水際帯の植生が豊かな場所に多く生息している。護岸改修された水路では泥が堆積し、水際植生帯が復元すると二次的な生息空間として定着することも多い。				
【県内での生息状況】	荒川水系の荒川、入間川、越辺川、高麗川、都幾川、槻川、新河岸川、柳瀬川、赤平川、吉田川、利根川水系の利根川、江戸川、中川、元荒川、神流川、小山川などとその支派川および用水や池沼などに生息する。県内での生息状況は以前から良好であったが、2003年頃から県内で繁殖が確認され始めたヌマエビ科の移入種が最近になって急速に生息域を拡大させており、競合関係にある本種が駆逐されつつある生息地も認められる（金澤, 2015a）。				
【特記事項】	本種に限らず、本県の主要河川の中下流域、農業用水、池沼に生息しているヌマエビ科のほとんどは、移入種のカワリヌマエビ属の一種に置き換わっている（金澤, 2015b）。				

〔目名・科名〕	エビ目サワガニ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	<b>サワガニ</b>	指定状況			
〔学名〕	<i>Geothelphusa dehaani</i> (White)	-			
【形態】	殻幅2cm程度。体色は赤・青・紫・褐色など変化に富み、地域により異なる。甲は前方にひろく、甲面は平滑で、胃、心両域の溝以外は平滑である。額は前縁が横に真すぐに切断された形で中央に痕跡的な切れ込みがある。				
【国内分布】	本州、四国、九州（南部）、南西諸島				
【主な生息環境】	河川の中下流域で湧泉がある場所や河川やその支川等に分布している。				
【県内での生息状況】	本種は荒川水系の荒川、赤平川、入間川、越辺川、都幾川、槻川、高麗川、新河岸川、利根川水系の小山川、神流川などその流域の支派川などに分布している。新河岸川流域の支派川では、湧泉が残っている場所で確認されているが、生息数は少ない。その他の生息地でも食用のための乱獲や河川改修工事、台風や豪雨に伴う河川の土砂崩壊等により個体数は減少している。本種は雑食性で歩行力があり、河川から細流や湧泉、さらに水辺から離れた湿り気のある場所にも生息する。				
【特記事項】	日本産カニ類のなかで、唯一、淡水にだけ生息する。				